

保育者養成における音楽教材への一考察

—学生への質問紙調査を手がかりに—

佐藤 真紀*・渡辺 厚美**

1. はじめに

保育者養成にあたり、ピアノを弾けるということは必ず求められる音楽的専門性の一つである。そのため、保育者を養成する大学や短期大学では、「音楽」や「幼児音楽」、「音楽の基礎」や「音楽演習（基礎）」、「器楽演奏（基礎）」、「音楽（子どもと遊ぶ）」などのいわゆる実技系の科目が設置され、弾き歌いを含めたピアノの演奏技術を高める指導がなされている。また、表現系（音楽）の科目として「音楽表現」や「音楽表現指導法」、「保育の指導法（表現／音楽）」などが置かれ、ピアノの演奏を中心とする音楽技術が子どもの表現活動へどう活かされるべきかを学ぶ授業が展開されている。一部の短期大学では実技系科目と表現系科目を融合させたような科目設定をしているところも見受けられる。いずれにしてもピアノが弾けることは保育者に欠かすことのできない重要な要素といえ、ピアノ演奏に関わるそれらの科目で使用される教材を見ると、学校によって様々なものが使用されていることがわかる。大別すると弾き歌いのレパートリーを増やすための教材、ピアノ演奏のテクニックを強化するための教材、採用頻度は低いが音楽理論を学ぶための楽典教材の3種類になるが、学校ごとで多様に組み合わせて使用している。

本論では、そうした保育者養成で使用される「音楽教材」に着目し、各保育者養成学校で使用されている教材の適切性について考察していく。流れとしては、まず現段階において各保育者養成学校で使用されている教材の傾向を把握する。続いて、教授の方向性を探る。さらには学生及び幼稚園教員を対象として、保育者に求められるべき音楽的専門性を調べた質問紙調査の結果を分析する。そして適切な教材や指導内容について考察を加えていく。

2. 多様な使用教材

学校別または実技系・表現系の科目別に様々な教材が使用されているが、実際にどのような教材が使用されているのか実技系科目を中心に見ていく。

筆者らが兼任している（佐藤は2018年度まで担当）大学（以下、T大学とする）を例に、そこで使用されている教材を示す。学年によってやや違いはあるが、『教職課程のための大学ピアノ教本 バイエルとツェルニーによる展開』（1977）¹⁾、『改訂ポケットいっぱいの

* 茨城キリスト教大学

**小田原短期大学

うた 実践 子どものうた簡単に弾ける144選』(2011)²⁾、『うたのファンタジー』(2008)³⁾の3冊が使用されている。『教職課程のための大学ピアノ教本 パイエルとツェルニーによる展開』(1977)には、『標準パイエルピアノ教則本』(1955)⁴⁾や『ブルグミュラー 25の練習曲』(1900)⁵⁾などから抜粋したものが多数掲載されており、和音のアレンジ奏法や指の独立を促すなどピアノの演奏技能の向上に特化した教材であるⁱ⁾。『改訂ポケット いっぱいのうた 実践 子どものうた簡単に弾ける144選』(2011)は、演奏レパートリーを増やすことを目的とした教材で、幼稚園や保育園で日々使えそうな楽曲が比較的簡易な伴奏で、数多く提示されている。2年生以降で使用する『うたのファンタジー』(2008)は、同じく演奏レパートリーを増やすことを目的にした教材であるが、『改訂ポケット いっぱいのうた 実践 子どものうた簡単に弾ける144選』(2011)とは伴奏譜が異なり、難易度が高くなっている。

こうした「ピアノの演奏技術向上」と、「レパートリーの強化」を図る教材を組み合わせることは一般的である。他の大学や短期大学で使われている教材を見渡しても、まさに上記の教材と同じものを扱っている学校も多く、概ね似た状況にあるといえる。ただし、一部の学校では、学生の演奏レベルに応じて、『教職課程のための大学ピアノ教本 パイエルとツェルニーによる展開』(1977)のような練習曲集の抜粋本を扱うのではなく、より本格的なピアノ教材を取り上げているところもある。例えば、帝京科学大学では使用する教科書を演奏レベルで分けているようで、中級者と上級者には『ブルグミュラー 25の練習曲』『ブルグミュラー 18の練習曲』『ソナチネ』その他⁶⁾を使用すると示されている。また帝京平成大学でも、「経験者(パイエル等終了者)はブルグミュラー、ソナチネ等、各自のレベルに合うピアノ曲。」⁷⁾と示されている。さらに十文字学園女子大学でも経験者の教材については、「全音ピアノピース、ピアノコスモス、トンプソン現代ピアノ教本、ショパンワルツ集などあらゆるピアノ教本から担当教員の指示で選択する」⁸⁾と説かれている。いずれも個々の演奏レベルに幅があるための対応であろうが、保育者養成という域を超えた演奏レベルを追求する様子が伺える。

なお、本紀要に関わる茨城キリスト教大学では『保育のための歌と遊び こどもの世界』(2011)⁹⁾と『ジュニアクラスの楽典問題集』(2008)¹⁰⁾が使用されている。後者は楽典の教材であり、演奏に特化した教材は『保育のための歌と遊び こどもの世界』(2011)のみということになる。この教材の特徴は、通常伴奏譜と簡易伴奏譜が併記されていることや、表現系の授業でも活用可能な手遊び歌が後半に多数掲載されていることであるが、「レパートリーの強化」に力が注がれている教材に分類できる。

3. 教授の方向性

各学校の使用教材からは、「ピアノの演奏技術向上」及び「レパートリーの強化」という異なるねらいの側面があることが示唆されたが、教材を検討する上で、教授の方法、すなわち指導内容についても考える必要がある。本来は、指導内容が先にあって、その後に

i 『大学ピアノ教本』の中では、「パイエルとツェルニーによる展開」とのみ書かれており、具体的にどの出版社の教本をもとにしているのかは不明である。よって、引用文献の4)や5)に記したものは一例であり、パイエルによるピアノ教則本に相当するものは他にもある。

教材選択がなされていくであろう。

再度、筆者らが関係するT大学での指導内容を例に示していく。T大学の場合、教材（楽譜）をそのまま弾けるよう指導するだけではなく、各教員が独自に配布資料を作り、コードネームに基づいた根音を中心としてベースラインをつけるベース伴奏と、主要三和音を中心とした和音伴奏を学習させている。さらには、オスティナートを中心としたわらべうたの伴奏など簡単な編曲法も指導している。

他の学校の実際の様子を知る由もないが、指導の内容が垣間見える研究がいくつかある。それらは保育者養成学校において求められる音楽的専門性を述べる文脈にある。例えば保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題を捉えた宮脇長谷子（2001）¹¹⁾は、時間的問題からバイエル教本を授業内で活用することを否定してコード学習を推進する立場にあり、子どもの音域に合わせた移調や、動きに合わせた即興的演奏能力が必要であることを述べている。また澤田まゆみ（2013）¹²⁾は、幼稚園教諭に求められる「ピアノ・スキル」を明示している。まず楽譜などを用いずに、子どもや保育者自らの声や動き、イメージや心の動きをピアノで「表現する力」が必要と示している。一方、楽譜を用いる場合には、楽譜や子どもの姿から読み取り、また感じ取ったものを「演奏に活かす力」や「自由でより豊かな伴奏をする力」が必要と示している。さらに自らの演奏技術、楽器学的な視点などを「子どもたちの発達に沿って用いる力」も必要であると示し、最終的に曲のジャンル、レパートリーの「演奏の幅を広げる力」も必要と示している。つまり、自分が感じたままや、その場の子どもの様子に適した即興表現力を求めつつ、数多くの楽曲を自由自在に操るような演奏表現力も求めているのである。両者がこれらの内容に沿った授業を、どの程度実践に移しているのかはわからないが、論述の内容と授業内容がそれほどかけ離れていないと想像するならば、T大学の指導内容とは異なった指導がなされているといえよう。

教授の方向性を探る上で、実は保育者に求められる音楽的専門性に対し、どこまでを要求するのが一つの鍵となる。少なくとも宮脇や澤田が求めているような力は、「レパートリーの強化」を意図した教本を用い、楽譜通りに演奏させ、実習のために弾ける曲を一曲でも多く増やそうとする指導の中では育まれない。またバイエルやブルグミュラー、ソナチネなどをこなし、演奏レベルを上げる指導も、即興的表現力の強化に直結する有効な手立てとはいえない。

結局のところ、教材の選択は指導の内容と深く関わるものであり、もっと言えば保育者に求める音楽的専門性を教える側や学ぶ側がどう捉えているのかと密接に関わってくる。そこで以下では、学生及び幼稚園教員を対象として、保育者に求められるべき音楽的専門性に対する認識の程度を調査した質問紙の回答を分析し、適切な教材や指導内容について考察する。

4. 質問紙調査の概要

坂田直子・山根直人・伊藤誠（2009）¹³⁾は、2008年2月～3月に東京都及び埼玉県内の私立・公立幼稚園に勤務する教師180名を対象に質問紙調査を実施した。その内容は、1）保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能について、2）保育の際に必要と考えられる指導方法について、3）ピアノの弾き歌いについてどのような点に難しさを感じたこと

があるかについて、4) 歌の伴奏をしなければならないとき、伴奏の楽譜が難しく感じられるものだった場合どのようにするかについて、と幅広いものであった。

以上の調査中、保育者としての音楽的専門性の育成に深く関わる内容は、1) 保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能についてである。本研究ではここに着目し、学生を対象に質問紙調査を実施することとした。坂田他(2009)の調査結果では、保育者の弾き歌いの技能、保育者自身の歌い方や声の表現方法、レパートリーの必要性とともに、身体的な表現の援助、劇やお話の援助としてのピアノ演奏の必要性などが示されている。まずは学生の調査結果を分析し、次に幼稚園教員を対象とした坂田他(2009)の調査結果と比較することとする。

(1) 目的

現場の保育者と学生との「保育者としての音楽的専門性」に対する認識の違いを明らかにし、保育者養成における音楽教材及び指導について検討する。

(2) 対象

対象としたのは、筆者らが兼任で勤務する私立T大学こども保育・教育専攻の1学年と2学年の学生である。1年生179名、2年生107名から回答が得られた。

(3) 実施時期

調査は2018年7月下旬に実施した。この時点で前期の授業は終了していた。

(4) 質問項目

質問項目は、以下の図1に示した保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能についての12項目である。

- | | |
|---------------------|-----------------------------|
| 1. 保育者自身の歌い方や声の表現技法 | 7. 子どもの身体的な表現を援助するピアノの表現技能 |
| 2. 子どもの歌の表現に関する知識 | 8. 劇遊び、お話などの際ピアノを効果音として使う技能 |
| 3. 子どもの音楽発達に関する知識 | 9. 登園時など生活のなかの歌のレパートリー |
| 4. 子どもが歌う歌のレパートリー | 10. 音楽に関する理論 |
| 5. 手遊び歌や遊び歌に対する知識 | 11. 合奏曲などの編曲の知識 |
| 6. 保育者の弾き歌いの技能 | 12. ピアノ以外の楽器を演奏する技能 |

図1 保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能についての質問項目

この12項目は、「保育の中で子どもの表現や音楽活動を援助する際に必要と思われる音楽的な知識・技能に関する」項目として、坂田他(2009)が作成したものをそのまま用いた。その理由は、T大学の学生と幼稚園教員との音楽的専門性に対する認識の違いを明確にし、今後の授業展開及び教材について示唆を得るためである。また、坂田他(2009)の調査と同様に、12項目それぞれに、「必要である」「やや必要である」「どちらでもない」「あまり必要でない」「必要でない」の5段階で回答を得た。

5. 調査結果と考察

1) 調査結果と考察

幼稚園教員の調査結果を図2に示す。T大学1・2年生の結果を合計したものを図3に

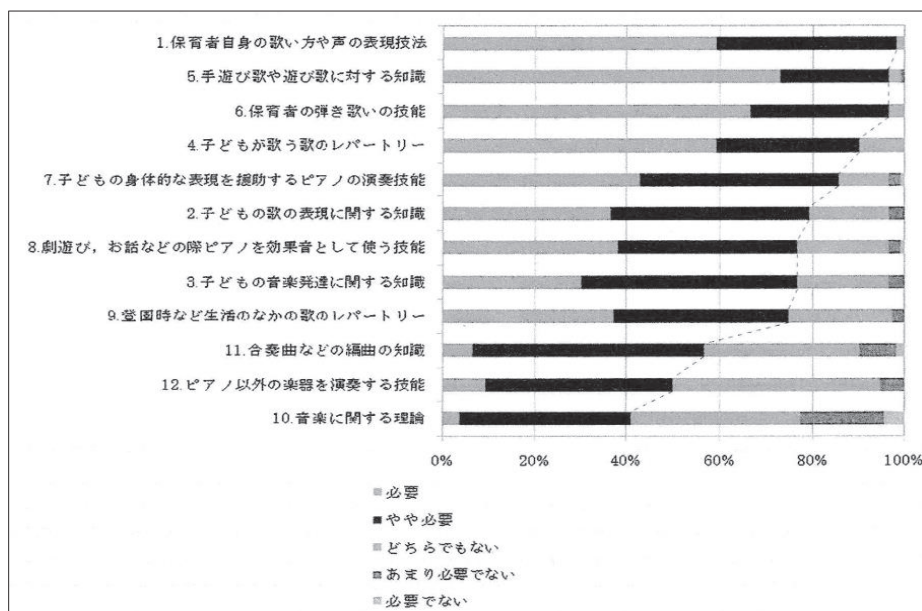


図2 保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能に関する質問（幼稚園教員）

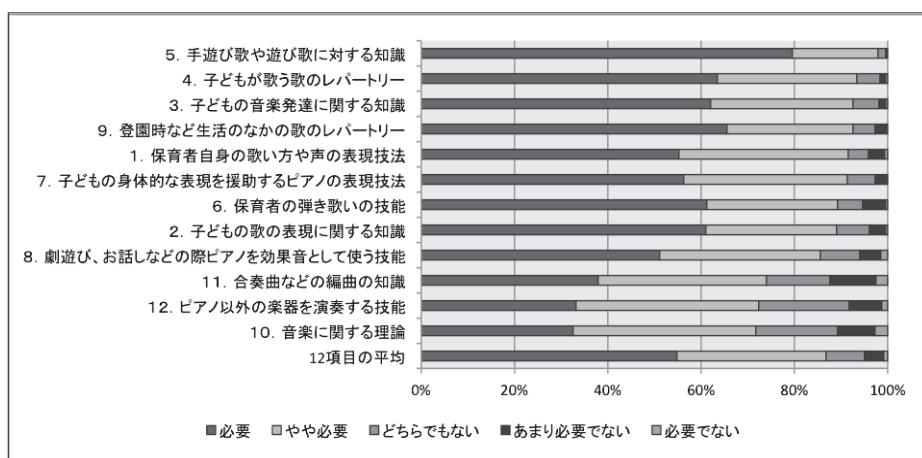


図3 保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能に関する質問（T大学1・2年生）

示す。この幼稚園教員の調査結果は、坂田他（2009）が東京都及び埼玉県内の私立及び公立幼稚園の教員110名の回答をまとめたものを解像度は低い再構成せずにそのまま掲載する。これらの図は、項目ごとのデータから、「必要」「やや必要」の回答を合計し、そのパーセンテージが高い順に並べたものである。なお、図2の点線は、坂田他（2009）が「必要」と「やや必要」をまとめて捉え、それがわかりやすく見えるようにと描き足されたものである。

また、T大学1・2年生の結果には、12項目を平均も示した。T大学1・2年生は「必要」の平均が54.9%、「必要」と「やや必要」を合計した平均が86.7%である。一方、幼稚園教員は、「必要」の平均が38.4%、「必要」と「やや必要」を合計した平均が67.1%である。このことから、幼稚園教員に比べて、T大学1・2年生の「保育者に必要と考えられる音楽的な知識・技能」に対する意識が高いように見受けられる。しかし、幼稚園教員の経験、環境面から捉え直すと、幼稚園教員の意識が低いといい切ことは難しい。幼稚園教員は、教員としての経験だけでなく、勤務する幼稚園の教育方針や教育内容から、必要性を判断している可能性が拭えないからである。一方、T大学1・2年生は、授業内で保育者として必要と学習したことをそのまま「必要」と考えているといえよう。

次に、「必要」と「必要」に「やや必要」を合計した上位4項目を見ていく。表1は幼稚園教員、表2はT大学1・2年生のものである。「必要」と「やや必要」は、強弱の幅はあるが、どちらも必要性を意識した回答である。しかし、「必要」だけと「やや必要」を加えたものとは、順位が入れ替わったり、異なる項目が現れたりしている。幼稚園教員とT大学1・2年生の必要性に対する意識を確実に把握するために、ここでは「必要」とそれに「やや必要」を加えたものを分けて示している。

表1 幼稚園教員が必要性を感じている上位4項目

順位	幼稚園教育「必要」	順位	幼稚園教育「必要」と「やや必要」の合計
1位	5. 手遊び歌や遊び歌に対する知識 (72.7%)	1位	1. 保育者自身の歌い方や声の表現技法 (98.2%)
2位	6. 保育者の弾き歌いの技能 (66.4%)	2位	5. 手遊び歌や遊び歌に対する知識 (93.4%)
3位	1. 保育者自身の歌い方や声の表現技法 (59.1%)	2位	6. 保育者の弾き歌いの技能 (93.4%)
3位	4. 子どもが歌う歌のレパートリー (59.1%)	4位	4. 子どもが歌う歌のレパートリー (90.0%)

表2 T大学1・2年生が必要性を感じている上位4項目

順位	T大生「必要」	順位	T大生「必要」と「やや必要」の合計
1位	5. 手遊び歌や遊び歌に対する知識 (79.5%)	1位	5. 手遊び歌や遊び歌に対する知識 (97.8%)
2位	9. 登園時など生活のなかの歌のレパートリー (65.5%)	2位	4. 子どもが歌う歌のレパートリー (93.3%)
3位	4. 子どもが歌う歌のレパートリー (63.5%)	3位	3. 子どもの音楽発達に関する知識 (92.5%)
3位	6. 保育者の弾き歌いの技能 (61.3%)	3位	9. 登園時など生活のなかの歌のレパートリー (92.5%)

幼稚園教員もT大学1・2年生も、「必要」と感じている1位は、5. 手遊び歌や遊び歌に対する知識である。「必要」と「やや必要」を合計した順位でも、幼稚園教員は2位、T大学1・2年生は1位となっている。手遊びうたや遊びうたは、音楽実技の授業内では取り上げていないが、「こども音楽」「音楽表現指導法」、「こども体育」「こども美術」及び

実習関係など多くの授業でそれぞれの授業内容と関連させて取り上げられている。そのため、T大学1・2年生の手遊びうたや遊び歌に対する意識も高いと推察される。

5. 手遊び歌や遊び歌に対する知識は、幼稚園教員とT大学1・2年生が共通して必要性を感じている項目であるが、その他の3項目に関しては興味深い違いがある。幼稚園教諭は、6. 保育者の弾き歌いの技能、1. 保育者自身の歌い方や声の表現技法、そして4. こどもが歌う歌のレパートリーに必要性を感じている。一方、T大学1・2年生は、4. こどもが歌う歌のレパートリー、9. 登園時など生活のなかの歌のレパートリー、6. 保育者の弾き歌いの技能、3. 子どもの音楽発達に関する知識に必要性を感じている。

幼稚園教員は、保育者自身の技能面に大きく必要性を感じているのに対し、T大学1・2年生はレパートリーを増やすことにより必要性を感じているといえる。T大学1・2年生は、授業内で多くのレパートリーの必要性を指導され、それを達成しようと取り組んでいる。教材もレパートリーを増やしやすいう、簡単な伴奏で多くの曲が掲載されている。

T大学1・2年生がこのように感じているということは、教材や授業内容がやはり、レパートリー重視であるためといえる。しかし、現場で保育者として活躍する幼稚園教員が必要と感じているのは、技能面における確かな技術であり、表現力であるといえる。子どもの前で表現者として演奏するとき、子どもの表現を引き出そうとすると、自信を持って表現する力が必要とされている。そのためには、これまでのレパートリー重視の教材及び指導内容を改め、一つ一つの曲を丁寧に仕上げていくこと、どの曲にも応用できる基礎的なテクニックをピアノ演奏においても、歌唱においても習得するということが望まれているといえよう。

次に、「必要」と「必要」に「やや必要」を合計した下位3項目を見ていく。表3は幼稚園教員、表4はT大学1・2年生のものである。これらの項目は、必要性が低く捉えられている項目といえる。

表3 幼稚園教員が必要性を感じている下位4項目

順位	幼稚園教育「必要」	順位	幼稚園教育「必要」と「やや必要」の合計
10位	12. ピアノ以外の楽器を演奏する技能 (9.1%)	10位	10. 音楽に関する理論 (22.7%)
11位	11. 合奏曲などの編曲の知識 (6.4%)	11位	11. 合奏曲などの編曲の知識 (10.0%)
12位	10. 音楽に関する理論 (3.6%)	12位	12. ピアノ以外の楽器を演奏する技能 (5.5%)

表4 T大学1・2年生が必要性を感じている下位4項目

順位	T大生「必要」	順位	T大生「必要」と「やや必要」の合計
10位	11. 合奏曲などの編曲の知識 (38.0%)	10位	11. 合奏曲などの編曲の知識 (74.0%)
11位	12. ピアノ以外の楽器を演奏する技能 (33.3%)	11位	12. ピアノ以外の楽器を演奏する技能 (72.3%)
12位	10. 音楽に関する理論 (32.5%)	12位	10. 音楽に関する理論 (71.8%)

幼稚園教員とT大学1・2年生が、必要性をそれほど強く感じていない3項目は、順位は変わるが同じ3項目である。この3項目について考察する。

12. ピアノ以外の楽器を演奏する技能という項目について、幼稚園教員に関しては、幼稚園の教育方針や備品としての楽器によるところが大きいと考えられる。幼稚園で演奏する機会がなければ、当然その必要性は感じられなくなるであろう。T大学1・2年生については、授業でピアノ以外の楽器を歌の伴奏として指導することが無いため、ギターやアコーディオンなどを演奏することに考えが及ばないといえる。

次に、11. 合奏曲などの編曲の知識であるが、現在、幼稚園で合奏をするために多くの合奏曲集が出版されており、子ども達に人気の比較的新しい曲もすぐに編曲されて発売されている。そのようなことから、幼稚園教員はそれらの曲集から選曲することも多く、それは編曲においては素人である自分たちが編曲したものより良いと考えるのではないかといえよう。一方、T大学1・2年生は、コードの根音に基づいたベース伴奏、主要三和音を利用した和音伴奏などの簡易な編曲を学んではいるが、それを子どもの合奏曲の編曲へと結びつけて考えることには解離を感じているようである。ベース伴奏や和音伴奏は、編曲というよりも曲を楽譜通りに弾くことができないときに使う方法だと捉えているといえる。

10. 音楽に関する理論は、11. 合奏曲などの編曲の知識と重なる内容も含まれているといえるが、幼稚園教員にしても、T大学1・2年生にしても、普段の演奏に必要な範囲を超えた音楽理論について必要と感じる者が少ないのではないかと推察される。子どもの歌の伴奏をするための読譜などの最低限の理論の理解がなくては、演奏は成り立たないからである。学生の音楽理論の学習に過剰な負担をかけたり、時間を割いたりすることは改め、音楽理論の内容の精選、指導方法の精査、教材選択に取り組むべきといえる。

2) 調査結果から見えてくるもの

これまで、T大学1・2年生の音楽実技の授業では、音楽的専門性を意識し、幅広い内容の授業展開をしてきた。しかし、現実にはレパートリー増やすことを中心として、基本的なピアノ演奏の技能や歌唱力育成に欠ける部分があったことは否めない。幼稚園教員の調査結果からは、演奏技能や表現力の必要性が重視されるべきであることが示されている。音楽理論は重要ではあるが、演奏に必要な範囲に内容を精選する必要があるといえる。

学生が保育者となったときに、一人の表現者として自信を持って表現し、子どもたちの表現を引き出すことができるような力を身につけさせるような授業が望まれている。そのためにも、ピアノ演奏や歌唱の基礎的な技能をしっかりと習得できるような教材が必要とされている。また、音楽理論については、その内容の精選が必須といえよう。

6. 保育者養成において望まれる音楽教材

教材の選択と指導内容は一体化したものであり、指導内容を検討するには、前段階として保育者に求められるべき音楽的専門性が何であると考えなのか、本調査などを通し、明確にしておく必要がある。そうしたならば自ずと音楽実技や音楽表現の授業内で、何を教えるべきかが見えてくるであろう。またどのようなことに配慮すべきかについても明らかになってくるであろう。

改めて、本調査を踏まえた適切な教材及び指導内容について整理すると、指導の際には

音楽理論の内容は演奏に必要な範囲内に留め、専門的になりすぎないように精選する必要がある。また弾き歌いのレパートリーを増やすことを第一とする授業を展開するよりも、一曲一曲を丁寧にさらい、ピアノの表現力はもちろんのこと、歌唱の表現力や、伴奏のアレンジ力、即興表現力などを増強するような授業を展開する方が望ましく、子どもたちの豊かな表現を引き出すことに通じるようでなければならない。このことから、現在、多くの各保育者養成学校が扱っている「レパートリーの強化」に特化した教材や、指の独立や強化など「ピアノ演奏技術向上」を図るための教材を使用するよりも、例えば、一つの曲をいくつかの伴奏にアレンジした楽譜が掲載されているような教材や、子どもの身体表現の中で、即興風に用いることができる喜怒哀楽を表現した音楽パターン集が掲載されているような教材や、子ども向けの歌唱方法やレッスン方法を詳説している教材などを取り扱うことが具体的に求められる。これらの内容が一冊に集約されたものは見当たらないかもしれないが、各指導者がいくつかの書籍から抜粋して扱うのも良いであろうし、自作の教材を手がけても良いであろう。総じて音楽実技系科目や音楽表現系科目の教材や指導内容をよく吟味し、陶冶された表現者の育成が目指されていくようでなければならない。

引用文献

- 1) 大学音楽教育研究グループ編 (1977)『教職課程のための大学ピアノ教本 バイエルとツェルニーによる展開』, 教育芸術社.
- 2) 富田英也; 鈴木恵津子 (2011)『改訂 ポケットいっぱいのうた 実践 子どものうた簡単に弾ける144選』, 教育芸術社.
- 3) 伊藤嘉子; 木許隆監修・編著 (2008)『うたのファンタジー』, 圭文社.
- 4) バイエル作曲/全音楽譜出版社出版部編 (1955『標準バイエルピアノ教則本』, 全音楽譜出版.
- 5) ブルグミュラー作曲/全音楽譜出版社出版部編 (1900)『ブルグミュラー 25の練習曲』, 全音楽譜出版社.
- 6) 帝京科学大学「2019年度シラバス (音楽Ⅰ)」
https://camps-web.ntu.ac.jp/campusweb/campusquare.do?_flowExecutionKey=_cAE3DA46B-15C3-4FF3-26A4-F6610262A9FB_k70E51E6F-0EF1-E4C5-10AE-BC0ECC7C7E07
- 7) 帝京平成大学「2019年度シラバス (子どもと音楽Ⅰ)」
[https://syllabus.thu.ac.jp/campusweb/slbssbdr.do?value\(risyunen\)=2019&value\(semekikn\)=1&value\(kougicd\)=390007201&value\(crcumcd\)=1190](https://syllabus.thu.ac.jp/campusweb/slbssbdr.do?value(risyunen)=2019&value(semekikn)=1&value(kougicd)=390007201&value(crcumcd)=1190)
- 8) 十文字学園女子大学「2018年度シラバス (音楽基礎Ⅱ・ピアノ基礎技術)」
syllabus.jumonji-u.ac.jp/ext_syllabus/syllabusReferenceContentsInit.do?sessionId=AdxaEl817VYVgTUR+CZuKKpU.kmap1?subjectId=023500019560&formatCode=1&rowIndex=0&jikanwariSchoolYear=2019
- 9) 尾林裕美子・濱田郁子・阪口睦美・鈴木紀子・上南美穂子 (2011)『保育のための歌と遊び こどもの世界』, ドレミ楽譜出版社, 東京.
- 10) 森本琢朗・池田恭子 (2008)『ジュニアクラスの楽典問題集』ドレミ楽譜出版社, 東京.
- 11) 宮脇長谷子 (2001)「保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題—養成校へのアンケート調査を通して—」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』(15-W):1-11.
- 12) 澤田まゆみ (2013)
「保育士・幼稚園教諭に求められるピアノ・スキルとは何か」『新島学園短期大学紀33: 57-66.
- 13) 坂田直子・山根直人・伊藤誠 (2009)「保育者養成における音楽的専門性の育成—幼稚園教師へのピアノ等鍵盤楽器に関する質問紙調査を手がかりに—」『埼玉大学紀要 教育学部』, 58(1): 15-30.

Examination of musical materials for childcare teacher training;
Clues from a questionnaire survey to students

Maki Sato and Atumi Watanabe

Abstract

The present paper focuses on music teaching materials in the training of childcare teachers and examines the appropriateness of the teaching materials used in childcare teacher training schools. The methods consist first understanding the trends of teaching materials used at each childcare teacher training schools at present and subsequently explore the direction of instructors. Furthermore, in order to consider of appropriate teaching materials, it is necessary to summarize what musical expertise is required of the content of instruction and childcare teachers. Therefore, a questionnaire survey on musical expertise was conducted and the results of the responses of students and childcare center instructors were analyzed. It was clarified that regarding the content of instruction, rather than there being a need for the content of music theory must be kept within the range necessary for performance and carefully selected so as not to be overly technical and developing classes that focus on increasing the repertoire of singing songs, it was desirable to develop classes that carefully practice each song and enhance piano expression, singing expression, accompaniment arrangement, and improvisation. In response to this, as examples of appropriate teaching materials, specific proposals such as teaching materials with more accompaniment arrangements, teaching materials with improvised music patterns that can be used in children's physical expression, teaching materials for singing ability for children were made.